校長室だより～燦燦～ №８４５

リカレント教育

2023.9.13

「リカレント教育」この言葉に出合ったのは、だいぶ前である。そのときは、興味を示すこともなく、表面的な理解にとどまった。ところが、ここ数年、この言葉を目にする頻度が上がってきたように思う。

リカレント教育とは、学校教育から離れた後も、生涯にわたって学び続け、必要に応じて就労と学習を交互に繰り返すことを指す。リカレントとは、循環する、繰り返すという意味である。リカレント教育は､スウェーデンの文部大臣で後に首相となったオロフ・オアルメによって提唱された。１９７０年には、経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）が推進することを決定している。

もともと、生涯学習の概念が基本にある。両者は、何が違うのか。生涯学習は、リカレント教育より広義の概念であり、目的が違う。生涯学習は、豊かな人生を送るために学ぶ。リカレント教育は、仕事で求められる能力を磨き続け、自己実現につなげる。リカレント教育は、スキルアップはもちろん、キャリア形成にも役立つ。

３０代の頃だったか、大学に行って学びたいと思ったことがある。高校受験も、大学受験も、教員採用試験も、さほど勉強しなかった人間がどうしたというのか。一度立ち止まって、充電しないと、蓄えないと、この先やっていけないと感じたのである。まさしく仕事で求められる能力が欲しかった。本当にやる気があれば、日々、自分で勉強すればいいのだが、あの頃は、とてもではないが、余裕がなかった。これは、一度、学校を離れるしかないと考えた。

結局、願いは叶わなかった。もし、２年間ほど大学で学んでいたら、その後の教員人生は違ったものになっていただろう。若者には、チャレンジしてほしい。チャンスがあれば前に進んでほしい。環境を変えるのは、骨の折れることである。だが、得るものが大きい。学校を離れることで、わかることも多い。専門的な知識や技能を身につけることの価値には、計り知れないものがある。

私の場合は、教壇に立ちながら、ちまちまと勉強してきた。現場を離れて、集中的に一気に学ぶ熱量には遠く及ばない。こう考えると、リカレント教育は、理にかなっており、必要性を感じる。人生１００年時代の到来を見据えると、何歳になっても学び直し、新たな段階にチャレンジできる社会の実現が求められている。社会人の学び直しの時代である。学校を卒業して社会に出たら勉強は終わりではない。社会が目まぐるしく変化する今日、仕事で求められる知識やスキルを継続的にアップデートすることが求められている。

日本は、リカレント教育に対して、まだまだ意識化も制度化も進んではいない。だが、私が思うくらいである。仕事のために学びたいという人は多いのではなかろうか。仕事をしたり、学んだりするのが当たり前という社会が、これからやってくるのかもしれない。